

---

# なりきれば勇者！英雄への道筋

くろーばー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なりきれば勇者！英雄への道筋

### 【Zコード】

Z0903Z

### 【作者名】

くわーばー

### 【あらすじ】

女神に授けられしその秘宝は力を与える。悪を挫く勇者の力を。だが、勇者の力を得るまでの、その道程は非常に過酷なものであるいろんな意味で。

今のところ警告タグは保険です。

大陸最大にして最古の国「グランドール王国の国宝『勇者の台本』」

遙か昔……魔王軍に蹂躪され多くの国が滅びゆくなが魔王軍に抵抗を続けていた残るたつた一つの王国グランドールにある日、女神が舞い降りた。

女神の名はフイラリエータ。かの女神に関する資料はその殆どが戦時下に失われ今残っているのは美しいかんばせであったこと、背に流れる緩やかな髪は淡く虹色に輝いていたこと、そして当時グランドール王国の第2王子アストリオル殿下にある秘宝を受けたこと、ただそれだけ。

その秘宝こそがグランドール王国の国宝『勇者の台本』この台本の通りに行動する事で女神が授けし勇者の力を得て不定期に甦る魔王を葬り去る事が出来るそうだ。

グランドール王国の記録では初代勇者様の誕生は約600年前、当時16歳のアストリオル殿下が挑戦し、19歳の時に勇者の力を手に入れ魔王を討ち滅ぼした。

それからというもの、ここグランドール王国では勇者が誕生する以前は無かつた『誕生日』を正確に記録、管理し16歳の誕生日を迎えると「勇者の台本」に挑戦することが法律で定められた。

理由は簡単、台本に『16歳の誕生日から数日後』という一文が書かれているから。

過去に17歳になつてから挑戦した人もいたらしいけど、いくら台本の通りに行動しても途中で起きるイベントが発生せず勇者の力が得られなかつたらしい。なんて面倒臭い台本……

それはともかく今日、私は16歳になつた。ついに秘宝「勇者の台本」に挑戦する。

正直なところ勇者なんて言われて魔物や魔王と戦うのなんて男の人がすることだつて思う。身体の作りが根本から違うんだもの。筋肉量だつて体力だつてどう頑張つても女の身では敵わない。

それなのに挑戦するのかつて?……面倒なことに台本には性別の記載がされていないらしいんだよね。

過去の勇者様達は3人とも男の人だし、女が勇者に選ばれる確立はとつても低い。

しかも今の時代に女が勇者になりたいだなんていつても……プライドの高いお貴族様や男の子達が認めるはずが無い。万が一、勇者になれたつてきっと酷い目に合わされる……挑戦しに行くだけでも少し……気が重い。

なーんて言いつつも挑戦しないつて選択肢は無いんだけどね。

法律で定められているつて事は当然守らなければ罰則があるといふことで……誕生日から6日経つても王城に行かなかつた場合、7日目には強制連行され10年間の奉仕活動と罰金

最も豊かな領地が没収され、庶民は年収と同額かそれ以上の金銭を支払わなきゃいけない。

庶民の生活は苦しい、16歳という体力のある子供の働き手を10年間も王城に預け、更に年収と同額の罰金を払うだなんて余裕は我が家には無い。だから本当に仕方がなく挑戦しに行くの。

台本への挑戦は既に庶民の間では成人の記念イベントとして扱われているし、ある一定の箇所まで進むことに報奨金が出るらしいから、あわよくば仕事を休んでる期間の給金分くらい貰えたらいいなってね。

そんなわけで私は役所から送られてきた『挑戦状』を持って王城へ向かうのでした。

## 1 (後書き)

父ちゃん曰く「なにも誕生日当口に行かなくていいんじゃないかな？」なんて言われたけど、もし挑戦者が多くて『数日中』に挑戦できなかつたら困るじゃないの。

子供のときから楽しみにしていて意気揚々と向かうわけじゃない。間に合わなかつたら罰金だから困るから、だから仕方がなく早く行くのよ。

『勇者の台本』の挑戦に必要なものは結構少ない。

食事も寝泊りするところも王城の一角にある挑戦者用の寮で無料で提供されるらしく、約一週間生活するのに必要なだけの衣類（普段着もしくは動きやすい服装）と動きやすい靴だけ。

勿論他にも各自必要とする物は持ち込み可能らしいんだけど細かい指定がされているのは上記持ち物と持ち込み禁止品だけ、持ち込んではいけないものは金銭、それに類するものと武器。寮の中では庶民も貴族も大体同じように扱われるらしいし盜難は勿論、賄賂や喧嘩での大怪我を防ぐため、かなあ？

そんなこんなを考えながら必要な物だけを指定の布袋に入れて背負っている私が王城の門扉の前にいる。

家から歩いて30分……訂正、普通に歩いたら50分のところを気が付いたら走っていて30分。ここまで到着してそこから更に30分、ここで突っ立つてる。それは何故か。

この国は『勇者の台本』があるお蔭で庶民でもこいつして王城を訪れる機会が与えられているけど本来であれば王城や王城の前なんてお貴族様達しかこれないからだ！

それも当然、王城は僅か歪みもなくピッカリ敷き詰められたレンガに統一感のある建物群、「ミー」つ落ちていないし道を歩く人々は煌びやかなドレスにという素晴らしい景観の貴族街からしか入る道がなく、しがない庶民の私には縁のない世界なのだ。

「ようと思えば来れると思つてゐる人もいるでしょ。だがしかし！お貴族様が自分達の街に庶民がいる事を望むと思ひますか？答へはNO！綺麗に維持された自分達の街に薄汚れた庶民が居る。世の中にはそれだけで気分を害し庶民にキツく当たり時には暴力を振るうつ危険人物もいるのだ。

そんな危険な場所に進んで出向く庶民は殆どいないので！中流階級である商売人は別だけどね。そんなわけで私も初めて来ました。一応ね『勇者の台本』挑戦者に危害を加えないよう法律があるから目印の布袋を背負つてゐる今は大丈夫、なはず、……多分。

首を軽く振るいちらりと横目で伺う。王国の紋章である二居の鷹を中心立派な装飾が施された門は大きくて威圧感がある、これらここを通るのかと思うと歩くだけなのにどこか汚してしまいそうで怖い。それなのに期待も喜びも大きくて。

これからのこと私は生涯でたつた一度きりの大イベント。高鳴る胸の鼓動が激しそぎて困る。ドキドキなんてものじやないドッコンドッコンと花火や太鼓を鳴らすかのように脈打つてゐる。どうせ勇者になんてなれないって、絶対に期待なんかしないって決めていたけどやつぱりこの気持ちは抑えられない！私、勇者になりたい！

例え無理でも後悔しないように全力で頑張ろー！

気合を入れて知らず知らずのうちにガツツポーズをつけてゐると門番さん達の方向から妙に暖かな視線を送られていた。

……うつ、緊張に加えて恥ずかしさまで抱えて挑まなきやいけないのね。私つて馬鹿すぎる。

覚悟を決めて震える足を叱咤して前に踏み出すと柔らかな物腰の門番さんが微笑みながら話しかけてきた。

「こんにちは、挑戦者の登録でいいよね。もつ覚悟は決まったのかい？」

「な、長らくお待たせしてしまってすみません。『勇者の台本』に挑戦しにきました、住民番号342876423、フイオリアです。よろしくお願ひします」

ペニリと頭を下げる謝りながらチラリと門番さんを見上げる。なんとなくだけど、さつきの視線はこの人のよつな気がする……

「大丈夫だよ、まずは『挑戦状』を確認するから見せてもらえる? うん、問題ないねありがとう。それじゃ次は荷物の確認をするからその女性騎士のところで荷物を出しておいで」

「分かりました!」

小走りで女性騎士の下へ行き机で布袋の中身を出す。

「こんにちは、『勇者の台本』に挑戦しにきました。荷物の確認をお願いします」

「こっちの女性騎士様も門番さん同様に優しそう。『勇者の台本』の柔軟なまなざしでこれまでの緊張が嘘のように安心感に変わっていくのが分かる。

「こんにちは、『勇者の台本』への挑戦ですね。今からここで荷物の確認をします。少し時間がかかるから良かつたら隣のテーブルでお茶でも飲んでいてね」

布袋の中身を確認するだけでそんなに時間がかかるものなのかな？疑問が顔に出ていたようで女性騎士様が口を開く。

「ごめんなさいね、本当に申し訳ないんだけど一部の方々のせいで衣類などの間に持ち込み禁止物が縫いこまれていなか確認するのが規則なの。本当に稀な事なんだけどね、厚手の衣類等の中に金品や宝石を隠して持ち込んでしまう人がいるから門の段階で人体制で隅々まで確認することになつてているの。あ、勿論衣類を確認するのは女性だからその点は安心してね。」

お貴族様も同じように確認するはずだから、もしかしたら結構キック文句を言われる事もあるのかもしれない。

「いえっ！全然大丈夫です！大切な仕事ですから気にしないでください！むしろ騎士様のお手を煩わせてしまって申し訳ないです！素敵な女性騎士様に確認してもらえるなんて光栄です！というかついでにサイン入れて欲しいくらいです！！」

女性騎士様がしょんぼりと眉尻を下げる姿を見て思わず慰めてしまった。庶民の小娘に慰められても嬉しくないだろうけど、それでも。なんかウツカリして随分と口を滑らせた気がする。まくし立てた後にあたふたとする私を見て騎士様はさつきよりもずっと柔らかく笑ってくれた。

「ありがとう。少し待つててね！」

変なことばつか言ひちやつて恥ずかしくつて、きっと今の私は真っ赤だけど気にしない。騎士様が笑ってくれたから。あの優しい笑顔のお蔭でやる気満タンです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0903z/>

---

なりきれば勇者！英雄への道筋

2011年12月5日19時58分発行